





門號 5194
卷 3



閑雜記卷之三

呂氏春秋う節とよびて曰くすれぞの論
はるからずも千里也地を絶て終始の刑をすめ
布とよどむひへ文を千里の地を小さくすめ
炮烙乃刑をやせんとすくらひの民のよきをすめ
じきに至りてはるも民のよきれんとすくらひの
まことれいれをりて文王と智とよき事とくほ
考の十才以耳目所聞見齊荆燕晉亡矣宋中
山已亡矣趙魏韓晉亡矣其皆故國矣とよき

昭和三十一年
一月十八日
藏於

呂不韋の死せり。趙襄子出圍賞
有功者。仲尼聞曰。豈不沒乎。
齊桓魯ノ。魯閔内侯ノ。仲尼
禮記内則篇。玦珥ノ。注。玦射者著於
右手大指。所以鈎弦而閑弓體也。擐者拾也。韜左
辟而收拾衣袖。以利弦也。擐者。持弓之法也。耳
章。耳中之飾也。小冠。穿孔而袖
者。收拾之法也。耳章。穿孔而袖

左飼軍は矢のまつたをよ
りうるわが取盡萬の弦ふ矢長五尺
み四指も扶とひ度四寸五狹也
又内則よ離尾不盈握弗食ともいむ
文選の注小堯設誅謗之木今之華表也以横木支柱
頭古人亦施之於墓とあき方孝孺うれにひの詩
も章毛のくらむと祖うる井とみ川と草ふ
たるるるるるるるるるるるるるるる
文選七命氣のすと希世の御兵とし尚う涼
劍とすを威もんを御者よけんとす

劍湖石無清音湖水有清音
兵士一見心已動
流流也多也少
降之不力劍湖石
云々之遙山山銓注引云謂辭多略而
不能載也山山之多也少通
鑒吾注王若問卿但言尔注爾猶言如鑒此
吾之是也

通鑑後漢紀曰舊錢出入者以八十為陌
宋紀事本末曰放紙鳩置文書其上至蒙古疊

則斷以誘被俘者

宋元通鑒曰劉琦使善沒者鑿沈其舟

續博物志曰閑東西風則晴東風則雨閑山西風則雨東風則晴又曰木與木相摩則然金與火相守則流陰陽錯行則天地大統於是乎有雷有霆水中有火乃焚大塊人間往往見細石形如小斧謂之霹靂斧又曰玉門之西有國山山上有廟國人歲出礦數千名霹靂之氣發於其上或以爲玉所生小霧蒸

又曰暮鳩鳴即小雨朝鳩鳴即大風

通鑑梁紀曰捨胡鼓拍之注以手拍之成聲木胡鼓
云樂又用以鼓之

傳家集曰今聞診御脉者常以十數工拙相雜是
非混殺。幾言進藥更相倚伏前跋後疐左瞻右顧
雖偷扁之術將安所施於是強者自專弱者附會
雷同比周共爲証罔不顧聖體とくあらわす清高
管子小穀貴則萬物必賤穀賤則萬物必貴此
之義也。商之主とくあらわす之義也。此之謂之宏

とくも穀歩とくあらわす氣地きじによく走く賤く
とくといへりうとくうの勢きよくも固ゆ
とくの少くとくすとくのとくニツムニツム

唐書裴行儉傳曰行儉每曰褚遂良非精筆佳墨とく

嘗輒畫不擇筆墨而研捷者余興虞世南耳

歐陽修歸田錄曰人相政以物相擊皆謂之打而工造
金銀器亦謂之打可矣蓋有槌撻作擊之義也至於造
舟車者曰打船打車網魚曰打魚汲水曰打水役夫餉飯
曰打飯兵士給衣糧從者執傘曰打傘以糊黏紙
曰打黏以丈尺量地曰打量手試眼之昏明曰打試至名

儒碩學語皆如此觸事清謂之打曰偏檢字書了無
此字丁雅
久者其義主考擊之打自音謫競當
作滴耿以字學言
之打字從手從丁丁又擊物之聲故音謫耿為是不知
曰何轉為丁雅也

又曰華元郡王允良燕王子也性好畫睡每自旦酣
寢至暮始興盥一作顙濯櫛漱衣冠而出燃燈燭治家
事飲食宴樂達旦而罷則復寢以終日無日不如當
是一宮之人皆晝眠夕興允良不甚喜聲色志不為他驕
恣惟以夜為晝忘其性之異前世所未有也故觀察使
劉從廣燕王婿也嘗語余燕王好坐木馬子坐則不下

或飢則便就其上飲食往來乘與奏於前酣飲終日忘性
之異也

教習の事は勿論敬業切要ふね原をめぐら
きあくまほ小止松の木、食ぬけいのちをす
まくとくまくとくまくとくまくとくまくとく

計、ソの事はあらず、紙とあやめ、日付
をさりてまし、また之に
とくと、敷床の積み物、四合
と申す。交りするまのもの、
右よきけまりのひらふはと脇胃
と申す。二川もとて、それ
をまつた、和、いひぬとすと之
れまつちのむへ、是を申す、
ゆゑに、ゆゑゆゑ、ゆゑゆゑ
ゆゑゆゑ、ゆゑゆゑ、ゆゑゆゑ

故為第一也。予之以季

ましらの王法西風の御心事
よ多毫書才ふあひにけり。和泊
ひゆひやうすく胸及涉流を汝の意め
ひゆひやうすく喉漱呼吸迫寒。抑痛席原因
石剣の傳西呻四支顫揺眩晕。心脅肢脛内
禁丸酒飲酒後止症復病。獨活流之守
塞萬症石淋膀胱。腎病。少陰家
酒蛭子能產活根丸。身中之妙
高波疾氣也治正又病氣也治正外氣也

山中夜雨
自詠詩
勝境獨
有此一
時
身在船中
如在雲
山間
心與天
地
同和

砂糖は甘美一月半のうちを全
車までのけとせ汁と年石炭、又引火
桶一本、あわと木と瓦の日よりはと素と水と油
火、みのりと川流れとまくらがまよの口ゆき
火と水と火と水と火と水と火と水と
火と水と火と水と火と水と火と水と火と水と
火と水と火と水と火と水と火と水と火と水と
火と水と火と水と火と水と火と水と火と水と

と申すてお爲しむ所了りと
彦よ二三事上つて穴をあけを湯水
麻布よりいりて一月ばかりして
少弟のことをいりておまかせ
りをうなづく、あれほどいは
まゆれと銷済する所よりまことに
にまゆれと皮とて湯とぬる
れ彦をもと入るれ焉彦と穴をよ
じゆる事とておまかせ

とく爲本片をまどひふいのむをすみかとせか
一セヨ斗もとてこすよがふかとゆふく
ありわゆ一費目がくのいよ沙粒の上
めつ布をかきあらううきてるはかと云
是にニするにあらまつてまつあらまつ
とくかとくめのくじく皮をまつれ
えりゆきのくさ粒をうるお福母之
経由、漂石、
享保庚午の典、萬の御書みあがつる
ちとせ書也

耳小む一のりよ、砂すつけ一の生薑をふ
りつて耳よりれあめを虫つるも
耳のくぬれ、生薑の根と少く何アリ
よつてくまし耳の穴へささへ
を水血のあくび、塗るを砂とく密文
く次上とよアヌ、又水のうをうを
方一すよきくねりつてくのすり
にやつて
うれう牛膝をくの生薑と等
ふくまく焼うてほる

霍のあくまく、ぬのへ左様、右のうの
りゆきをうすく、ぬれとくわく
まゆひし、柳のあくまく、ゆごくもと
つまくけ、のいもよ
たまのせんぐる、杉やよしむらわ
なぐく、茶そろはよ、四百粒下りよ

血のまゝに、鮮のまゝに、酒のまゝに
わざのあつたが、ゆる栗のれ枝葉かよ
やまく、ほんとうに

もはめの名^{ハナシ}、あまくまでも
又つまよひもとてまよひ
生まよひ、よくとつまよひるまよひ
ア・茎^{ハシマ}くもとつまよひもとて
少^{ハシマ}くもとつまよひふくまよひ
犬^{ハシマ}くもとつまよひ、席^{ハシマ}くもとつまよひ
けよ小^{ハシマ}くもとつまよひ
そちやまよひつけよまよひ
まよひまよひまよひまよひまよひ
前まよひまよひまよひまよひまよひまよ

まうふまれゆふ。おのぞめら
あくわむとく。よもいに
うほへか。うよ

盜汗アヒトハを止めメスルる
物モノ湯ヨウ

卷之三

草花也
魚の方

二
三
四
五

右の如きは、生ま
るがみとよもぎをまつて、
まよもじゆくい

むちあくべ一の上れ骨のまくらを七次でけられ
するゆゑ十一かやくへ

万葉の人のつづりは、
夢ねよあ
、
是れ
硼砂をもつてゐる、硼砂三石銭也
硝玉手、淡波毛河さく井と名し
て、淡波毛河の舟、船木の硼砂をも
つてゐる、硼砂をよし合葉都
まつてゐる

寛政七年の秋より江都の町の軒
よりおれのまことに相手町名と
うきの國商の方へいは

身の内に 画入らる
事あると又は遠引するも後語のて
ひよみのまゝに おりれども之を放
てよしむの身にあつて ひよみのまゝに
鎧を身につけり、蔓莉子の龍首の身をわ
きる事あると云ふ 宮粉サエと申ゆ
る也。 とよりて字のう字ぬつけかへ
まくまくとましいされ、字くじくすら
伊豫の山は持參すありかかまつは常
らまくまくとやい

塔松山にあつて宿す
うまはりのまほのゆ
めおと朝ちぬとひま
とよ時、三四もおとせき右の
あらわら底穴へがくい
めおとが下穴をも
トとて、ひきとふと一宿
まのむに雨ふれを修氣流へ申用
一月を半夜、二月を半
三十度と山家としゆる年

よしと枝やくまをすく 二三のとくまと
うまととくまをすく ふに木ふる
育て 法事上のとくまはまことに一斎のとく
山石とくまのとくまとくまに入らぬとあくま
ゆきとくまといつとくま りまわゆきとくま 寛
めれ、春不くまのとくま ゆきとくまとくま
めれ、春不くまのとくま ゆきとくまとくま
引ひきとくまめれ、春不くまのとくま
めれ、春不くまのとくま 江戸のとくまとくま
山のとくまとくまとくまとくまとくま
とくまとくまとくまとくまとくまとくま

まよひのうへりてゆきしを 曹子が書一了と
いふ漸移校え能都針御おのと傷言論
甲乙主に計大金ち承の多く通すと
治術のゆきれりの紅葉山を郡の差
至る東都を計内の御り也とゆき
あらかじめの御傳の御傳を
もとよりは、皆之と謂ふと
主風みやもとあれと
さめ生く、行る、忽ち治療りしりわら
ゆきのよせとゆきのよせ

市中よりあつまひては
衆テ集引けば
糸と織りあがりたる山をも
てての日か本物の御
ゆえわざとひぬれども
わざとひぬれども
之もまことにありませ
うぬ儀とひぬれども
おとこまことにありませ
あきよしむかしの
米川とひぬれども

の事小ちよれ未の川にさかへるゝと
主の見ゆにせはうがまのあらわ用ひて
ソリぬきの多う哉と爲ふにあ
ひつたまくよの度をすとてたま
ムチに葉をしもとす商人移りて
トキモアシテお方と色合はばはる
主のあはれとて人情の如くめぐらされ
け葉とあれとてとく烟草種類の新葉
とくれく度ぬまうとて御とて集め
れとくの葉ゆきとくの經品と

却利とすとくの葉富商の御とす
きとすと
テテ御川の川の川の川の川の川の川の
トキモアシテお方と色合はばはる
主のあはれとて人情の如くめぐらされ
大川の川の川の川の川の川の川の川の
主のあはれとてお方と色合はばはる
湯ゆきとてお方と色合はばはる
主のあはれとてお方と色合はばはる
主のあはれとてお方と色合はばはる

邵堯夫咏天意诗云天意無他只自然自然之外更無天不欺谁怕居暗室絕利須求在一原未嘗力時猶有说到收功處更無言聖人能事人難
繼無價明珠止在淵

靜此景其誰言

又月到天心處風來水面時一般清意味料得

少人知

楊應之題居壁云有竹百年有香一爐有書
千卷有酒一壺如是足矣

東坡詠承天夜游云元豐六年十二月十二夜
解衣欲睡月色入戶欣然起行念無與樂者
遂步承天寺尋張懷民亦未睡相與步于中
庭中如積水空明水中藻荇交橫蓋竹柏影
也何夜無月何處無竹柏但少閒人如我兩人耳
戴安道曰陰映巖流之際偃息琴書之側寄心

松竹取樂魚鳥則澹泊之願畢矣

唐子西有詩云山靜似太古日長如少年餘光
猶可醉好鳥不妨眠世味門常掩時光枕上便
夢中頻得句拈筆又忘筌

倪文節公曰松聲山禽聲夜蟲聲雀聲琴
聲棋子落聲雨滴階聲雪灑窓聲煎茶聲
皆聲之至清者也而讀書伴吾聲為最

醒言曰聽瀑布可滌蒙氣聽松風可豁煩襟聽
簾雨可以勞慮聽鳴禽可息機管聽琴絃可消
蹠念聽晨鐘可醒濁腸聽書声可束游想不

清云玉瓶下
月明松竹風
秋聲萬葉裏
此是吾家境
游漁隱居處
不勞亦不急
但使無事時
日日有清風

熱ニシルヤアナリ日トモテモヤクハ
の外の火落トヨリテムイタリヤクアリ
シモモヒメガタリモリスル外の清音等
セアレ清音トヨリナキ者ナシトヨリモリ
シモモヒメガタリモリスル外の清音等
セアレ清音トヨリナキ者ナシトヨリモリ
シモモヒメガタリモリスル外の清音等
セアレ清音トヨリナキ者ナシトヨリモリ

テラタニ興ナシリテモアリテ山の音
キモ猛ナリテアカモ音ナシモナシモ根
シモロヒタリ

彩色ナシアリハ牛眼子半リニ温湯

多能鄙事曰煎蘿木法槌碎以沸湯浸三兩煎
濃色以加白礬濾入盃攬勺

又曰點燭 黃蠟 松脂 槐花各一斤 浮石四錢右一盞
落用燈心布燒一晝夜僅點一寸

又曰宿火炭好胡桃一个燒半熟灰搘三五日不絕

又曰漆木作絳真色大黃濃煎汁刷上晒乾又
刷先五七次用石灰淹之乾則調勻色成擦去其灰
又曰鍊琉璃法黑錫四錢目硝石三錢目白
石末二錢目右搗飛極細以鍋用炭火鎔前三物和
之欲紅入朱欲青入銅青欲黃入雌薰欲紫入代赭
石欲黑入杉木炭並攪勻全成色用鏟箒夾抽成
條白則不入他物

又曰治轉筋松節木用酒煎服

又曰治湯火傷臘月山茶花為末香油調付

又曰治傳尸勞瘵阿魏一錢目桃枝大搖 摆榔一錢

甘草三寸青蒿大搖葱白三寸以童便三升浸桃
蒿葱甘四味煎取六合却入阿魏更煎三沸作
二服盜服時入換擲未半夕攪勻服了必吐
後必安；時再服一服勞虫必出送藥人勿與患
人對立若男患則以女人煎藥女患反是忌雞犬
等觸犯一年五服病自除根

又曰治針入肚不出方右酸棗燒存性為末溫
酒調服覺額痒即從原入處出如患在上食後
服在下食前服

又曰辟蟻凡器物用肥皂洗抹布抹之則蟻不上

又曰擣犀角解成小塊如豆薄紙包內人懷中乘暖急投臼中搗之應手成粉

又曰研乳香用紙包內辟縫中良久研如粉或以燈心同研亦可

又曰禁竹根穿過揩砌聚皂角刺埋土中障之則止

又曰引竹過牆法竹根所及處埋死貓或狸即過

又曰止竹生米竹生米即欲枯死初生時取大者一

根截上止留下三尺空其中實以糞即止

又曰爛錫法以水銀潰其爛如泥

又曰爛銅法右以鳥糞入水同煮即可雕刻

梳頭令髮不落法側柏葉又大片胡桃去壳榧子肉三个同研細以擦頭皮或浸水常搽之可

治雀卵班方白梅肉櫻桃枝猪牙皂角紫背萍為細末常洗面極能去班

治體氣并口齒惡臭方丁香半錢霍香葉零陵香甘松各三錢香附子白芷當歸桂心枳殼益智仁各一錢白豆蔻二錢射干半錢為細末煉蜜為齊杵千下丸如桐子每含化五丸服至二十日身香

東壁方桑皮柳皮小灰陳草灰石灰五灰用木

煎濃汁入醤醋點之

寒日迎風令手不冷方以馬牙硝為末唾調塗手及面上

治狐臭方以白灰用隔一二年陳米醋和傅腋下
未久多能效予不知其法之何如也
止了後多無犯也此亦是良方也

六尺角獸中一小角一寸許其肉可食也

毛刺

自 えのひめあくすゑの又ハリヅリキ
ハリヅリキ 玄毛のひづるふ 玄毛

声

ミミをあらひてそののすこをもあられ
柳のあらひて そののすこをもあられ

波神一郎

やも おのまきあらあらのまきあら
波神一郎

うそをあらひて山のまきあら

ほきのゆふ人波神一郎

兩のまきあら

毛刺のまきあらのまきあら 波神一郎

毛刺

あやめあ
ねのづきづき

卷四

卷之三

卷之四

三
五
八

蒙古文書

卷之三

臣等謹將各款情形開列于後

卷之三

王山王桂芳
呂詠
李成之合

浅井 謂浦 法源堂 淳齋 梅家 又人法林 吕浦文
威素主人印信 銀封 人深承四堂之子之二

十一作手

剔木 烤漆 地、黃漆

堆朱 多色の下地を用ひて、其上に

線を

金糸 金線の形で、主として

緑あくまことうすを用ひて

お花絵等を多くあつたものがある

犀皮 あくろくひのくわく漆

地をあくまことうすを用ひて、

堆漆 地をあくまことうすを

堆鳥 刻みの中ふき詰めを施す

剔金 玳瑁または象牙

丸連金 金糸を組んで

松皮 黒く引け出しがあることをいふ

此うちの五年松皮高のうつとある

一 たゞすと

少多病之日多矣。但以所居
生调养之不至，故亦多矣。予樂至十
八年，自是久為勞矣。予嘗病生足，廿年
已來，每以文字地老，遂不復作。予之病
病生於足，久不瘳，予保養之，幸可
生焉。

予服一味糊丸，其效甚速。糊丸之法，
糊丸者，米也，白蜜也，水也，酒也，入一

徐氏筆精曰：鴨脚子即銀杏也。歐陽永叔和梅

聖俞詩云：鵝毛贈千里，所以重其人。鴨脚雖百箇，
得之誠可珍。此果此地不能種。今人又呼為白菓。
其葉頗似鴨腳，又鮑照賦園葵云：有鴨脚二字。
又曰：治鼻衄。川芎當歸生地黃人參各半錢，側柏
葉白芍藥伏苓各三錢。

又曰：治頭風痛。荊芥一錢，川芎一錢，白芷一防
風，牛蒡子一錢。

又曰：相馬法。鼻欲濶，腫欲平，食糖欲寬，下唇欲
寬，口又欲深，上唇欲方，鼻欲寬，大眼下欲有肉，面
欲如刮，先眼如垂鈴，脣骨欲圓，耳欲如削，箇頰

骨如員緊欲筭細簪欲高項欲長細而寧排
鞍欲厚脊梁欲平腰欲短促硯骨欲平腹欲平
助線骨欲密汙溝欲深后看欲約如尾欲端尾
骨欲短外腎欲小腿欲如琵琶尾欲筭細后脚
欲曲曲池欲深庶節欲曲后路欲尖節欲近節骨
欲鹿脚欲大而實腕欲促胫骨欲細鑑肉欲厚
蹄欲圓前脚欲直掌欲高

傳家寶曰除燈蛾臘月四九內雪水浸燈草晒
乾點燈蟲蛾俱無敢萬千生命功德無量又
臘棕油燈能碎蛾

固崖老年全賴牙齒飲食滋養須於壯年小
便緊咬牙閉口每早叩齒幾遍至死不衰日上
久瘡即用密陀僧研為極細末於未炭前一時
用酒送下六分或五分勿弱減半服後心中嘈雜
餓半日即愈日上

夢遺用綢布帶將大腿一隻或右或左扣緊項
睡醒則解伸左右更換曲腿睡日上

耳聾用菖蒲木通全蝎胭脂各五分麝香
一分其為末用黃蠅三錢勻化待微冷入前藥
和為丸如枣核樣磁器固收勿走藥氣以綿裹

塞耳中痒一兩日再換新者漸通因上

主油和焉ナリ。序胆揮狂雄英蓋法右
四友疏黃搘丹鴻臚金錢月酒五味右
少一工皆末之合也。又一舛。主之左
油之和。又一舛。主之右。次之減。又
一舛。此之主之。油之和。又一舛。不
足五精也。決百目。確之八九。形之
小。在中用ゆ。

之
ぬまよ 棒狂の決斗
二三歩入るにあらゆる
沙汰の如く
沙汰一
舞

えもよきしのえあくよくなれ
うれむるよしのねえ
けのうはまよしのねえ
うへとおのじのうはまよしのねえ
うへとおのじのうはまよしのねえ
うへとおのじのうはまよしのねえ
うへとおのじのうはまよしのねえ
うへとおのじのうはまよしのねえ
うへとおのじのうはまよしのねえ
うへとおのじのうはまよしのねえ

徐氏集精曰左傳僖二十二年僖負羈盤餐
寘鱗焉晉公子重耳受餐返鱗故事本此人
誤以為蒲相如事曰完鱗曰歸趙時之甚矣
又曰天孫獸名漢時有貢此獸者因以名閣以

藏秘書

又曰牛走順風馬逆風故曰風馬牛不相及
又曰桂海虞衡志云打碑用袖子皮蘸墨以代
墨宜墨而不換紙拭之良然

又曰捕蟬今之裤子捕蟬每用榧櫟塗竹竿
梢上粘之即得唐李建云怪系竿之冉冉運

微粒而我纏欲翻飛而逾滯兮知性命之長捐
自古已然矣

又曰猫之善捕鼠者日常睡終日躑躅若必不
捕鼠見陳止齋集猫不捕鼠者名麒麟猫有
味

